

「ライトノベル」の歴史と社会的可能性について ～2022年のライトノベル論～

藤森 弘大

活字離れ、書籍の売り上げ減少、電子書籍の普及などにより、町の本屋さんが減少している状況にある。しかしながら、「ライトノベル」と呼ばれる小説は今なお規模を拡大している現状がある。そこで本研究では、ライトノベルを歴史的な側面から今一度明らかにする。生き残れた理由、今後も成長していくことが可能なのかを社会的可能性から考察していく。

「ライトノベル」とはどのような小説なのかという原点を出発点にした。本研究におけるライトノベルとは、狭義には中高生の学生をターゲット層とし専門のレーベルから出版されイラストが使われた小説のことであり、様々な題材がある。

ライトノベルは複雑な存在となっているが、これにはライトノベルの歴史が深く関係している。「ライトノベル」とは小説のジャンルの一つだが、始まりは「SF」などといった既存のジャンルが出発点となっている。また、海外由来の「ファンタジー」などの要素が合わさって誕生した。また、「ライトノベル」という言葉は当初はなく、イラストも途中から使われるようになった。

現在のライトノベルについて現状を確認した。ライトノベル専門の出版レーベルが当たり前になり、アニメの題材になるなどした。ライトノベルの売り上げも最大になり、最盛期と言える。一方で、「ネット小説」と呼ばれるインターネット上において誰もが作者になれ、読者にもなれる時代になった。特に、今なお人気の「異世界」などのジャンルが多く登場した。また、「ライト文芸」と呼ばれるライトノベルと一般文芸の中間的な小説も登場し、人気になり始めた。

ライトノベルの今後について考察していくなかで、技術的可能性と世代間についての問題が浮き彫りになった。一つに「AI」が書いた小説が、ライトノベルにも影響される可能性があること。すでにAIが書いた小説が賞を受賞するなど、実践的、技術的に現実となっている。一方で、既存のライトノベルの読者の世代移行について論じている。かつて学生だった読者層は大人になった。ライトノベルが一過性の娯楽になっている可能性に言及し、ライト文芸がこれの解決策になっていることがわかった。

また、ライトノベルの社会的可能性については、ライトノベルはその始まりから社会における流行に影響されて成立していった。そして、時代によってインターネットなどの技術的流れにも対応してきたことが読み取れた。また、ターゲット層が学生である点を含めて、若者の世相を反映した存在とも考えられる。

今現在も様々なトレンドを吸収し、小説を通して還元している。一方で、書き手が一般のネット小説やAIなど様変わりが大きく、今一度ライトノベルと社会の繋がりを再確認する必要があるのではないだろうか。